

| | | | |
|---------------|---|------|-------|
| 派遣者番号 | 管 30K09 | 氏 名 | 濱田 昌也 |
| 研究主題 —副主題— | 学校評価と関連付けた授業改善システムの構築 —管理職の「授業観察の観点」を軸とした人材育成— | | |
| 派遣先 | 東京学芸大学教職大学院 | 担当教官 | 今井 文男 |
| 所属 | 教育庁指導部指導企画課 | 所属長 | 石田 周 |

キーワード：学校評価、教育活動、経営活動、授業改善システム、授業観察の観点

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

学校には、学校経営方針を実現するために取り組むべき事柄として教育活動と経営活動の二つがある。これら二つの取組は、それぞれが独立しているものではなく、相互に関わり合いながらPDCAサイクルを展開することで、学校経営方針が実現される。

例えば、学校経営方針を実現するための授業改善の取組は、校内研究・研修だけで行うものではなく、日々の授業においても常に取り組むべきものである。したがって、個々の教員が取り組む日々の授業改善と組織的に取り組む校内研究・研修などの授業改善とをつなぎ、システムとして構築していくことが求められる。そこで、授業改善システムを「学校経営方針の実現に向けた授業改善の取組を教育活動と経営活動の観点から捉え、相互に関連付けながら、計画・実施し、評価・改善し続けながら質の高い授業にしていく過程である」と定義し、学校評価を教育活動と経営活動を関連付けるための歯車（ツール）として捉えた。

本研究では、授業改善を学校評価と関連付け、授業改善に資する様々な取組をつなぎ、目標と目標達成のプロセスを継続的に評価・改善しながら授業の質的改善を目指す授業改善システムの構築を目的とした。その際、授業改善システムに位置付けられている取組の方向性を示唆する事項として、管理職の「授業観察の観点」に焦点を当て、学校評価を機能させるツールとして用いることとした。

2 研究の内容・研究の方法

- (1) 学校評価について、その目的と機能に関する先行研究により明らかにする。(A. 理論研究)
- (2) 管理職の授業観察について、その目的や方法について調べ、「授業観察の観点」を作成する。(B. 基礎研究)
- (3) (1)(2)を踏まえ、どのように授業改善システムを構築するのかを示す。(C. 実践研究)

3 研究の結果

A. 理論研究<学校評価に係る内容>

(1) 学校評価の目的

平成28年度版学校評価ガイドライン（文部科学省）では、自己評価について「各学校が、自ら

の教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること」と示している。

「目指すべき目標」の設定について、篠原(2012)が「目標の達成状況を把握するための『成果指標』、取組の状況を把握するための『取組指標』を適切に設定して置くことが重要である」と示したように、学校は、学校経営方針における教育活動と経営活動の重点を、学校評価における「成果指標」及び「取組指標」と連動させていく必要がある。

(2) 自己評価を機能させる三つの視点

野村総合研究所(2011)は、「学校関係者評価の充実・活用に関する調査研究報告書」において、自己評価の活用・充実が進んでいる学校には、「目標の共有」「プロセスの設計」「チームワーク（教職員の協力・協働体制）」の三つの視点が機能していることを示した。学校評価の目的は、評価することそのものではなく、いつまで（短期、中・長期）に、どのような姿（学校、教員、子供の姿）を、どのように（教育活動、経営活動の重点）達成していくかを明確にし、その達成に向けた過程を改善し続けながら取組の質を向上させ、目標やそのプロセスを達成していくことにある。

B. 基礎研究<管理職の授業観察に係る内容>

(1) 授業観察の目的

授業観察の目的について、工藤(2008)は、「教師の授業改善を促し、子供の学習効果を高めるためのものである」と示している。また、小島(2015)は、「自己申告書への取組状況の確認」「授業力向上への指導」「授業改善の状況の確認・指導」の三つの目的を示している。つまり、授業観察は、教師の資質・能力を向上させる人材育成の機能や授業改善を軸とした学校改善を促す機能の両面を担っていると捉えられる。管理職は、これら二つの機能の両立を目指すことにより、授業観察が学校経営方針を具現化するための効果のある一機能として位置付けることが重要である。

(2) 授業改善につなげる授業観察と指導

授業観察の方法として、工藤は、「管理職の授

業観察の視点を全教師に知らせ、指針とさせる」ことの重要性について述べている。「授業観察の視点」を共有することで、授業観察は、個々の教員が取り組む日々の授業改善や組織的に取り組む校内研究・研修などの授業改善の指針となるとともに、視点を基に自分の授業を振り返り、自己評価する機能をもち合わせることで、効果的な人材育成へとつなげることができる。

(3) 授業観察の視点と洞察

本多 (2017) は、「管理職が授業観察時に意識しているもの(視点)と、その視点から管理職が把握している実態や収集している情報等の見取り(洞察)を明らかにする検討」に関する研究を行っている。研究の結果、「教師」のカテゴリーに関する「洞察」が最も出現頻度が高く、多くの管理職が「教師」に関する「洞察」をしていることか分かった。さらに、「視点」と「洞察」の関係を調べたところ、全体の個数(189)のうち、「子供」の「視点」の個数(41)は、「環境・もの」の個数(43)に次いで高く、子供の「視点」からは、教師が「洞察」されやすいことが分かった。

(4) 「授業観察の観点」の作成

本研究では、「授業観察の視点」を、授業観察のみに限って活用するのではなく、学校経営方針の実現に向けた一つのツールとして活用することを含めたものにするため、「授業観察の観点」として、広く捉えた。

また、本多の研究結果を踏まえ、「授業観察の観点」を、図の「子供の学びの姿」に焦点を当てて作成し、子供の学びの実現を促している「教師」の指導の手だてを洞察する授業観察を行うことで、教科等の固有の資質・能力だけでなく、汎用的な資質・能力を育成することができると考えた。

C. 実践研究<授業改善システムの構築プロセス>

| 主体的な学び | 対話的な学び | 深い学び |
|----------------|---------------|-----------------------|
| ①興味・関心をもつ | ①改善点を見いだす | ①考えを再構築する |
| ②用語(課題)意識をもつ | ②新たな課題に気付く | ②学びを自覚して、実践する |
| ③自己の課題をもつ | ③成果や課題を自覚する | ③知識を相互に関連付けて考える |
| ④予想を立てる | ④考えのよさに気付く | ④問題を発見し、解決方法を考える |
| ⑤解決の方法や手順を計画する | ⑤考えの深みに気付く | ⑤情報を精査して考えを形成する |
| ⑥既習内容を生かす | ⑥よりよい考えを見いだす | ⑥思いや考え(意図)を基に創造する |
| ⑦新たな気付きを生み出す | ⑦考えを統合する | ⑦他の単元(題材)や教科等につなげて考える |
| ⑧粘り強く取り組む | ⑧考えを吟味・検討する | |
| ⑨解決の過程を振り返る | ⑨先哲の思いや願いを捉える | ⑧生活や社会につなげて考える |

図 思考、判断、表現することと関連から具体化した子供の学びの姿(参考:東京都多摩教育事務所)

本研究では、次の段階を踏んで、授業改善システムを構築した。

(1) 学校経営方針を学校評価と関連付け、授業改善の取組において、教育活動と経営活動の観点から成果目標及び取組目標を設定する。

<具体の取組>

- ・ 学校評価と関連付けた「重点項目整理表」と「課題別カード」

(2) 教師の指導及び子供の学び方に関する実態把

握を行い、個々の授業改善の重点を設定する。

<具体の取組>

- ・ 「授業観察の観点」を指標にした自己の指導の強み・弱みと子供の実態把握

(3) 授業を計画し、個々の授業改善に生かす。

<具体の取組>

- ・ 「授業観察の観点」を示した「授業観察カード」
- ・ 週毎の指導計画に位置付けた「授業観察の観点」

(4) 校内研修を行い、組織的な授業改善に生かす。

<具体の取組>

- ・ 「授業観察の観点」を軸にした校内研修

(5) 子供自身が「授業観察の観点」を自覚した学びができる授業づくりを行う。

<具体の取組>

- ・ 子供が学びを自覚する「観点カード」

4 研究の考察

本研究の主旨は、授業改善のシステムを構築することである。一つ一つの取組は、システムを機能させる一要因でしかない。学校の実態によっては、板書や発問・指示などといった指導技術に焦点をしばった「授業観察の観点」も考えられる。学校は、個々の取組だけを取り上げて授業改善を行っていくという考え方ではなく、学校づくりという観点で取組を捉え、それらをつないで捉えていけるようなシステムの思考を高めていかなければならない。

また、学校には、教育活動ばかりに視点がいきってしまう傾向が見られる。各々の教育活動の充実を図ることはとても大切である。しかし、それぞれの取組が単独で行われてしまっているのは、子供や教師、学校の成長は十分に得られない。学校経営方針と密接に関係のある学校評価をツールとして用い、教育活動と経営活動を結び付けることが重要である。

5 今後の展望

<学校評価>

【課題】自己評価だけに焦点を当てており、「学校関係者評価」「第三者評価」に言及できなかった。

【展望】自己評価をどのように学校関係者評価に生かす、学校改善につなげていくか考えていく。

<人材育成>

【課題】管理職の「授業観察の観点」を軸とした様々な取組が、どのように人材育成につながったかについては、十分な言及ができなかった。

【展望①】一定の意識の変容や自己の課題の克服といった結果は得られたが、取組を通して、どのような力が身に付くかについて、人材育成指針を基に考えていく。

【展望②】「授業観察の観点」を軸に、教員同士が授業観察を行い、協働しながら日々の授業改善に取り組む姿が見られるようマネジメントしていく。